雄略天皇九年（４６４年?）紀小弓宿禰の戦死と大磐宿禰の遠征、淡輪古墳のいわれ
　古代日本のまとめ・雄略天皇のホームページから調整

■［紀小弓宿禰は吉備吉備上道采女大海を伴って新羅出征］
三月、天皇は自ら新羅を討とうと思われた。しかし、神が天皇を戒めて、
「行ってはいけない」
と言われたので、天皇は行かれなかった。そこで紀小弓宿禰、蘇我韓子宿禰、大伴談連、小鹿火宿禰らに詔して、
「新羅は前から朝貢を重ねていたのに、私が王となってから身を対馬の先まで乗り出し、跡を草羅に隠して高麗の貢を妨げたり、百済の城をとったり、自らの貢物も怠っている。狼の子のような荒い心があって、飽きると離れ去り、飢えると近づいてくる。汝等、四卿を大将に任ずる。王師をもって攻め討ち天罰を加えよ」
と言われた。紀小弓宿禰は、大伴室屋大連をして天皇に憂え訴えさせるのに、
「私は微力と言えども、謹んで詔を承ります。しかし今、私の妻が亡くなったばかりで、後を見てくれる者がありません。公はどうかこのことを天皇につぶさに申し上げて欲しい」
と言った。大伴室屋はそのように奏上した。
天皇はそれを聞き、悲しみ歎かれ、吉備上道采女大海を紀小弓宿禰に賜わり、付き添って世話をすることにさせられた。そして送り出された。

■［紀小弓宿禰の戦死］
紀小弓宿禰らは新羅に入り、進撃が目ざましかった。新羅王は夜、皇軍が四面を囲んで、鼓声をあげるのを聞き、すべて占領されたと思い、数百の騎兵と共に遁走した。小弓宿禰は追撃して敵将を斬った。しかし残兵は降伏しなかった。小弓宿禰は兵を収め、大伴談連と合流し残兵と戦った。
この夜、大伴談連と紀岡前来目連は力闘して死んだ。談連の従者である津麻呂が、軍中に入ってその主を尋ね、
「我が主、大伴公は何処にお出でになるか」
と言うと、ある人が、
「お前の主は敵のために殺された」
と言い、屍のところを指し示した。津麻呂はそれを見て、
「主人が死なれたら、生きていても仕方がない」
と言い、再び敵中に入って共に死んだ。しばらくして残兵が自然に退却した。その後、大将軍である紀小弓宿禰は病気になって薨じた。

■［紀大磐宿禰出征と小鹿火宿禰との争い］
夏五月、紀大磐宿禰は、父が彼の地で死んだことを聞き、新羅に行き、小鹿火宿禰が司っていた兵馬・船官と諸々の小官を取って、自分勝手に振る舞った。小鹿火宿禰は大磐宿禰を深く憎んだ。
そこで偽って韓子宿禰に告げて、
「大磐宿禰は私に語って、『自分はその中また韓子宿禰の官も取るだろう』と言っていた。気をつけた方

がよい」
と言った。こうして韓子宿禰と大磐宿禰には隙間ができた。
百済王は二人の不仲のことを聞いて、韓子宿禰のもとに人を遣わして、
「国の境をお見せしたいから、お出で下さい」
と言った。
それで宿禰たちは轡を並べて行った。
河に着いてから、大磐宿禰は馬に河水を飲ませた。このとき、韓子宿禰は後ろから大磐宿禰の馬の鞍を射た。大磐宿禰は驚き振り返って、韓子宿禰を射ち落すと、川の流れにはまって死んだ。この三人の臣は、以前から先を競って道を乱したので、ついに百済の王宮に至らないで引き返してしまった。

■［紀小弓宿禰を淡輪に埋葬］
そこで采女の大海は、小弓宿禰の喪に従って日本に帰った。
大伴室屋大連に悲しみ訴えて、
「私には骸をおさむべき所が分りません。どうか良い所を教えて下さい」
と言った。大連はそれを天皇に申し上げた。
天皇は詔して、
「大将軍の紀小弓宿禰は、竜の如く登り、虎のように睨んで、天下を鎮めた。背く者は討ち、四海を平げた。身を万里に労してついに三韓に死んだ。哀れみ悼んで視葬者を遣わそう。また大伴卿は紀卿と同じ国の近い隣りで付き合いも長い」
と言われた。

そこで大連は詔を承って、土師連小鳥に墓を淡輪邑に造らせ葬らせた。
大海は喜んで黙っていられず、韓奴室、兄麻呂、弟麻呂、御倉、小倉、針の六人を大連に送った。
吉備上道の蚊島田邑の家人らはこれが始まりである。

小鹿火宿禰は、特に紀小弓宿禰の喪のためにやってきたが、ひとりで角国に（周防国都濃）に留まった。
倭子連をして、八咫鏡を大伴大連に奉って、願い申した。
「手前は紀卿と共に帝に仕えることは堪えられません。どうか角国に留まらせていただきたい」
大連は天皇に申し上げ、角国に留まることになった。
これが角臣らが角国に居り、角臣と名づけられたことの始まりである